



#05

めもおふトラリアンゲル

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽



体験してみて初めてわかるってことは結構多いと思う。
そう、百聞は一見にしかずってやつ。

たとえば今の僕みたいに。

記憶喪失とかも。

「うーん、やっぱり何も思い出せないか」

診察室のイスに座る僕の前で、女医の先生はあごに手を当てながら何度も僕のCTの結果を見ている。

「外傷は大したことないんだが……これはむしろ心因性なのかもしれないね」

軽く肩間にしわを寄せて小首を傾げる先生。ゆるふわウェーブの栗色の髪がそれにあわせて小さく揺れる。どこかリスの大きな尻尾を連想させるような動きだ。

僕が言うのもおかしいけれど、セクシーというよりはちょっと可愛い感じの先生だと思っ

た。まだ十代後半ぐらいにみえるけど……医大出ないとお医者さんにはなれないわけだし、きつと童顔でやつなんだろうな。

でもあれだよな。おかしいよね。

自分の名前とか思い出せないくせに、日本語はちゃんと覚えてて喋れるとか。

なんでだろうね。自分が記憶喪失になって初めて気づいたよ。

「病院」とか「お医者さん」とか「ベッド」とかって単語は全部出てくるくせに、自分のこととなるとからつきし。

パーソナルな情報のみ欠落する……「全生活史健忘」って言うらしいけど、こういうことがあると人間の脳っていったいどういう構造になってるんだらうって疑問に思ってしまう。

「かずくん、大丈夫ー!？」

「うわーっ!？」

診察室のドアを勢いよく開けて飛び込んで来たのは、ツインテールの少女だった。大きな驚色の瞳が特徴的で、よく整った目鼻立ちはまるで高価なヴィスクドールのよう。全体的には北欧系美少女という感じ？

「大丈夫？ どつか痛いところない？ お腹すいてない？ ちゃんとおトイレには行った？」

「え？ え？ あの、その……」

僕の両手を握って心配そうにこちらを見ていた少女は、不意にハッとした表情を浮かべて黙り込んだ。

「……もしかしてかずくん、あたしのことも忘れちゃったの……?」

涙で潤んだ瞳。紅潮した頬。少しくもるような甘い声。

こんな美少女を前にしても、情けないことに僕はやっぱり何一つ思い出せなかった。

この娘は僕のなんなんだろう？ 幼なじみ？ 姉弟？ ……いや、僕よりは幼い感じだからもしかして妹？（自分の歳も思い出せないのにおかしな話だけど…）

…まさか、彼女？…とかないよね？

「かずくん、ほんとにママの事も忘れちゃったのー、ひどいよー！」

「えー!？」

ママって…まさか目の前の美少女が!？」

いやいやいや、おかしいでしょ！ どう見ても僕より年下でしょ、この娘!

「あー、お母さんずるい！ かずくんに面会するときは一緒だって言ってたじゃない！」

開けっ放しのドアから今度はポニーテールの娘が入ってきた。

こちらも自称・ママに負けず劣らぬ美少女だ。

確かAKBのメンバーに似た娘がいたはずだ…って、なんで僕は自分の名前も思い出せないのに、AKBとかはすらすら出てくるんだよ!？」

…僕ってもしかしてアイドルオタクだったのかな。なんかわからないけどちよつとショツク。

「抜け駆けしてお兄ちゃんを奪おうなんて絶対に許さないんだから！」

え？ お兄ちゃん？ っていうことはこっちの娘が僕の妹…なの？

「お兄ちゃんと結婚するのはあたしなんだからね！」

……はあー!？」

「ねー、お兄ちゃん！」

そういうとポニテ美少女はぎゅつと僕に抱きついてきた。胸のあたりに押しつけられる柔らかな感触に一瞬気が遠くなる。

「ちよ、ちよつと待って！ ちよつと待ってください！ なんにも思い出せないのはほんとにごめんなさいなんですけど、あの…『結婚』っておかしくないですか？」

僕はリビドーに押し流されそうになった理性をなんとか総動員してポニテ美少女を自分から引きはがす。

「そうよ、みゆちゃん！ おかしいわよ！ かずくんはあなたのお兄ちゃんでしょ！ あなたは妹でしょ！」

なぜか我が意を得たりとばかり、自称・ママ美少女は小さなほっぺをふくらませて矢継ぎ早に喋りだした。

妙に怒りすぎのような気もするけど、妹の社会的に誤った淫らな考えを正してくれるのはさすがお母さんだ。

「かずくんと結婚するのはお母さんなんだから！」

「ええっ!？」

途中まで良かったのにどうしてこうなった!？」

「お母さんよりあたしの方がお兄ちゃんと血が近いんだから、あたしが結婚するに決まってるでしょ！」

いや、それはむしろ逆でしょ!?

「ばかね。かずくんみたいな甘えん坊タイプの男の子にはあたしみたいな経験豊富な大人の女がびつたりなんだよ！」

いえ、全然経験豊富な大人の女に見えない……っていうかむしろ幼女なんですけど!?

その時、二人の言い争いを見かねた様子の女医さんが、優しく口をひらいた。

「まあまあ。みゆちゃんもママも落ち着きたまえよ」

「『パパは黙ってて!』」

……完全思考停止。

3人がなんやかんやと喚いているのは聞こえるけど、その音声情報が言語として、文字情報として認識できない。あまりの展開に僕の脳はシナプスを発火させることをやめてしまったようだ。

「あのパパってまさか……」

たっぷり10分は思考停止したあと、僕はおそろおそろ女医さんに尋ねてみる。

「いやー、和人に心理的ショックを与えるのもなんだから、今まで黙っていたんだが……父です(キリッ)」

女医さんの真つ直ぐな笑顔がまぶしい。

……でも父親が男の娘とかー!! ありえないんですけどー!!

……なんとなく……なんとなくだけど、僕は記憶を取り戻さない方がいいような気がする。

たぶん。いや、きつと、絶対。

というか僕が記憶を失った元凶はこの3人のせいな気がしてならない……!

「いやー、でも黙ってて良かったよ。なんせ和人に初めて『可愛い』って誉められたしね」

「え? え? あれ思ってただけのつもりだったんですけど、僕、声に出して言っちゃいました?」

「でもいつかはセクシーと言ってもらえるように、父さんこれからも頑張るからな!」

「いや頑張らなくていいから!」

「と・に・か・く! お兄ちゃんはあたしのものなんだからね!」

「もう、みゆつたらかずくんから離れなさい! かずくんは、あ・た・し・の・も・の・な・

ん・だ・か・ら!」

「ちょ、ちょっと二人とも危ないからやめて! 落ち着いて! とりあえず落ち着いてって

ば!」

目の前で「僕」争奪戦を繰り広げ、すったもんだの騒ぎを展開している二人をなんとかなだめようと僕は必死になる。

すると突然「ママ」と「みゆ」が動きを止めた。

「かずくんは！」

「あたしとママとどっちを選ぶの!？」

振り返った二人の美少女の双眸が紅く燃えている。マジだ。この二人、本気で僕に求婚している……!

「はっはっはっ、もちろん私を選んでもらってもかまわないだよ、スイートハート★」

「パパは黙ってて！」

横から出てきた女医さんを華麗な連係プレイで押し退ける二人。

そんな息が合うならもつと仲良くすればいいのに……。

「さあ！」

「かずくんは！」

「「誰を選ぶの!？」」

記憶を失っているから断言できないけど、たぶん僕は生涯最高の難局に遭遇してるんじゃないだろうか……。

つていうか、こんな三択答えられるわけじゃないかー! あまりにも非現実的だよー!

「「さあ! さあ! さあ!」」

そして視界に迫り来る3人の美少女を大寫しにしたまま、僕の意識はホワイトアウトした……。

「今回もかずくん、誰も選んでくれなかったね……」

「うーん、一度記憶をなくしてもらって、フラットな状態で誰か一人選んでもらう、つていうのはナイスアイデアだったと思うんだけど……」

「まだ設定が甘かったのかしら?」

「そーよー、大体りおの『お父さん』設定は無理ありすぎだよお!」

「そーお? 宝塚チックでいい感じだったと思うけどな。なんだったら薔薇もくわえて……」

「はいはい、妄想乙、妄想乙」

「なんだよー、なつの『お母さん』設定の方が無理ありまくりだったじゃん! 見た目小学生のくせになにが『経験豊富な大人の女』だよー!」

「なによー!」

「なんだよー!」

「がるるるっ!」

「がるるるっ!」

「もう二人ともやめて! 真面目な話、次はちゃんと選んでもらえるようにみんなで頑張らな

いといけないでしょ！」

「うーん、今度はもう少し追いつめられた感じの設定の方がいいんじゃないかしら？ たとえば無人島に4人だけ流されちゃったとか……」

「あー、それいいかもしれない！」

「えー、あたし今度は吸血鬼きゅうけつぎモノがやりたーい！ あたしが吸血鬼で、かずくんが隸属れいぞくなの！
うふふふ……」

「あたしたちは？」

「……通りすがりのゾンビ？」

「なにそれ完全にみゆルートじゃん！ ずるいじゃん！」

「えー、僕は今度は中世ヨーロッパをやりたいなーベルサイユの薔薇ばらとかー」

「りお、ホントそのヅカ脳、どうにかしたほうがいいよ……」

静かに横たわる和人を前にふくらむ、美少女3人の邪悪で華麗たくらな企みはとどまることを知らないのだった……。

おしまい